



沖縄大学図書館

第40号

2005.4.1

館報 南十字星

発行：沖縄大学図書館

〒902-8521

沖縄県那覇市字国場555

TEL (098) 832-5577

FAX (098) 834-1127

(館報 南十字星)

## 新刊紹介

### 出会いと気づきの記録『おきなわ福祉の旅』

(ボーダーインク、2005年2月発行)

学生部長 加藤 彰彦

「広島を忘れるな 長崎を忘れるな 沖縄を忘れるな 伊江島を忘れるな 過去を忘れる者は もう一度それを繰り返す」(「反戦平和資料館」内部の掲示)

沖縄大学に赴任して2年目の6月、沖縄タイムス社の創立50周年企画の一つとして「おきなわ福祉の旅」の連載をしてみないかとの依頼を受け、毎週一回小さなコラムを担当させてもらうことになった。

その第一回目は、沖縄大学「子ども研究会」の学生諸君と一緒に出かけた伊江島での合宿研究会の夜に書いた。

その日は、沖縄戦慰霊の日(6月23日)でもあった。民宿「土の宿」で伺った木村浩子さんの言葉「福祉文化というものは、平和でなければ実現しません」と共に忘れることのできない思い出である。

それ以来、県内の社会福祉施設や団体、さまざまな研究会を訪ね歩かせてもらった。

当事者から直接に話を聴く。その現場に実際に足を運ぶ。そこで感じたこと、考えたことを文章にしていくこと。それがこのコラムの基本姿勢であった。

その中に、国立療養所沖縄愛楽園がある。

一般社会から長い間隔離されてきたハンセン病患者の歴史と現実。この時の体験を学生諸君にも共有してほしくて、後日、愛楽園自治会の迎里竹志さんの講演会が実現した。

また、自らの不登校体験を講義の中で語ってくれた学生の発言から、相手と向かい合うことの難しさと大切さが、学生諸君の胸に浸み込んでいくのを感じることがあった。

この時、発言した学生は地域の中で不登校児を支えるサークルを結成し、社会福祉協議会の協力も得て着実に活動を深めている。

さらに、沖縄では始めて発足した「おきなわ福祉オンブスマン」活動も、この一年地道に活動を続け、本年2月に一周年目の総会を開催し、新たな段階へと一歩を進めている。

今、ふり返ってみると、この連載を続けてきた一年間は、大きな歴史的転換期でもあったということができる。

人は生きていく上で、どうしても必要なものを守らなければならない。

それを「人権」という。生きる権利、働く権利、そして学ぶ権利。こうした権利は奪うことができない。奪ってはならない。

きびしい不況の時代だからこそ、お互いに助け合い、励まし合って人間は生きていかねばならない。これが「福祉文化」の基本である。聴覚障害の学生が入学したことからはじまった「ノートテイク」活動も、今では大学全体の取りくみになりつつある。

考えてみると、この本では、沖縄大学の学生諸君と共に学んできた記録が書かれているような気がする。社会福祉と現場実習で考えさせられたことも多い。

人は「出会い」「気づき」そして一緒に何かを「つくり」出していく。

そんな出会いと気づきの記録が、この本には一杯つまっている。忘れられない一冊となった。

新城将孝、三谷晋、小森雅子、武市周作 編

『法学 — 沖縄法律事情 —』

(沖縄大学地域研究所叢書)

(琉球新報社、2005年4月発行)

法経学部長 新城将孝

本書は、法的トピックを取り扱ったものです。それも本書のサブタイトルでみるように、沖縄において発生した事象・事例を取り上げています。企画は、主として沖縄大学法経学部の学生に、中でも、「法学概論」の受講生に、身近の事象・事例から関心をもって法学を勉強してもらうためにというところにあります。格好良く言えば、「新聞から(ないし現場の)法律問題を考えよう」ということですが、具体的に、執筆にあたっては、①沖縄の地元新聞社(琉球新報)の新聞記事を使い、②可能な限り初学者にわかりやすい表現を用いてということになりました。また、③執筆も、飛ぶ鳥も落とすほどの新進気鋭の先生方にその多くをお願いしました。学生の年齢に近く、学生の身近にいて、また、感覚的な面でも多くを共有しているであろうということからです。その意味では、きわめてユニークさがあり、冒険的な執筆が沢山あります。例えば、大学生と飲酒、飲酒運転と刑罰、フリーターやパラサイト・シングル、「キセツ」と労働法というように、学生にとって関心のもてるであろう課題ないしは事象・事例を取り上げています。また、軍隊と憲法9条、日の丸焼却、米軍機の騒音、領土問題(尖閣列島)、米兵引渡問題、珊瑚の白化問題、門中と当事者能力等と沖縄ならではの事象・事例を取り上げています。

法学ないし法律学といえ、**「難しい」、「かたぐるしい」、「理屈ばい」**等々のマイナス・イメージがあります。これは、沖縄大学での筆

者担当の「法学」、「法学概論」、「企業組織法」での学生の感想です。本書がこのような学生イメージをプラスに変えていくのに果たしてどれくらい役立つのであろうか。意図したところからみると、その不十分さも感じているところです。確かに、法学は古い学問で、その体系もしっかりしています。本書でも、初学者にとって必ずしも理解しやすい説明や叙述にないようなところもあります。この点、私たち執筆者も、今後の課題として自己研鑽に励んでいかなければならないと自省しているところです。読者の皆様のご指導をいただきながら精進していきたいと考えています。

本書の執筆者のほとんどは、沖縄大学と何らかの関わりのある先生方であり、沖縄大学地域研究所の「沖縄の法学」研究班を中心としたメンバーです。内訳は法経学部教員3名(編者、研究所兼任所員)、法経学部元教員2名(研究所特別研究員、うち編者1名)、法経学部非常勤講師2名(現1名、集中講義元講師1名(研究所特別研究員))、沖縄大学地域研究所特別研究員2名、その他2名です。沖縄大学法経学部の学生にとって、身近の先生達を書いた本ということになりますが、半数を超える県外在住の先生方の協力を得ています。県外の大学においても、本書がテキストとして使用されるということもあろうかと思われま

執筆者を代表して

森山卓郎 著

『コミュニケーション力をみがく』

(NHKブックス、2003年発行)

人文学部助教授 須田 義治

あなたは自分の日本語に自信がありますか。敬語がうまく使えないと思ってはいませんか。もっと上手に日本語でコミュニケーションしたいと思っている人に、この『コミュニケーション力をみがく』という本を薦めたいと思います。この本は、ちょっと改まった手紙や日常会話における、敬語などの丁寧な表現の仕方について書かれています。この本を書いたのは、森山卓郎先生と言って、日本語の文法研究では、とても有名な先生です。

近頃は日本語に関する本がたくさん出版されていますが、そうした本の中には、日本語研究の専門家でない人の書いたものもあります。その種の本の最も「素人」<sup>しろつと</sup>的なものには、こういう言い方が正しくて、こういう言い方は間違いだとしか書かれていません。それに対して、専門家の本には、ただこういう言い方をするというだけでなく、それについて学問的な理論に裏づけられた説明がなされています。この本も、そうした学問的な説明がなされている点で、ほかの多くの「日本語本」と違ってきます。ですから、やさしく書かれているとは言っても、説明が難しいと感じる人もいるかもしれません。しかし、よく読んでいけば、なぜ、こう言って、こう言わないかが、理屈として納得できると思います。

たとえば、お礼を言うときに、「ありがとう」だけでなく「すみません」とも言うからといって、「合格おめでとう」と言われて、「すみません」と答える人はいないでしょう。また、断るとき

には、主人「今、コーヒーをいれます。まあ、どうぞ」客「いや、結構です、すぐに失礼しますから」というように、「結構です」を使いますが、先生「君、このあたりを掃除しなさい」生徒「いや、結構です」というのは、おかしいですよ。このように、どうして、この場合は言えて、この場合は言えないのかということが、この本では、ていねいに説明されています。また、最近、おかしな表現として話題になっている「お会計のほう」や「お勘定は500円になります」などについても触れられています。

この本では、こうした表現について、主に「ポライトネス」という理論、より広くは「語用論」という言語学の理論に基づいた説明がなされています。「ストラテジー」などといった難しそうな言葉も出てきますが、そうした難しそうな言葉は気にしなくても、内容は理解できると思いますから、心配しないで、読んでみてください。

この本は、各章の終わりに、練習問題がついています。実際に、答えを考えて文章を書いてみれば、きっと、あなたの日本語の力は、ぐんぐん伸びていくと思います。また、敬語について、もっと基本的なことから知りたいという人は、菊池康人著『敬語再入門』（丸善ライブラリー）を読んでみるといいでしょう。英語や中国語などの外国語の勉強も、もちろん大切ですが、私は、日本語を教えているものとして、みなさんに、母語である日本語の勉強も忘れないでほしいと思っています。

片山恭一 著

『世界の中心で、愛をさけぶ』

(小学館、2001年)

法経学部法経学科4年次 長 山 楽

純愛。辞書で調べると、「純粹な愛情。特に、男女間のひたむきな愛情。」とあった。この本には、その言葉通り、男女のまっすぐな感情や素直な気持ちが、ストレートに描かれている。純愛の全てがこの一冊の本に詰まっているといっても過言ではない。

まず物語は、主人公の「朔太郎」とヒロインである「アキ」の両親が空港へ向かう場面から始まる。この本は過去と現実を行き来しながらストーリーが展開されていく。過去では、朔太郎とアキの初めての出会いから二人が結ばれるまでを数々のエピソードと共に追っていく。出逢って初めの頃は、お互い意識していないが、ある事をきっかけに二人は急接近する。と同時に、朔太郎はおじいちゃんから昔話を聞かされ、そこでとんでもない計画を持ちかけられる。やがて付き合い始めた二人だったが、朔太郎はアキと肉体関係を持ちたいと考えるようになり、友人に協力してもらい無人島で二人きりになることに成功。が、しかし…。それから、アキは病気で入院することになる。

現実の世界ではアキはもう死んでいて、朔太郎とアキの両親は、「自分が死んだら遺骨をオーストラリアに撒いてほしい。」というアキの遺言を叶えるためにオーストラリアに向かう。朔太郎は一度、修学旅行でオーストラリアに来ていたが、アキは入院していたため一緒に行けなかった。一度は一緒に来たかったという強い思いを抱きながら、現地に着いた朔太郎の心境は複雑だった。日本に戻り、アキのいない生活が何年か続いた。大切な人を亡くしてしまった

朔太郎は、その後…。

人を好きになるということはとても素晴らしいことである。人間は皆、自己中心的であり、誰も自分を一番に考えている。ごく稀にそうでない人もいるかもしれないが、大半がそうである。しかし、人を好きになるということは違う。自分よりも相手のことを考え、大切にしたいと思う。ずっと一緒にいたいと思い、その人自身に自分の生きる意味を見つける。これが愛である。愛にも様々な形があるが、何年も何十年も一途に一人の人だけを思い続ける気持ちこそ純愛と呼ぶにふさわしく、その恋が実るか実らないかは別の問題である。たとえ実らなかったとしても、想いは消えることなく永遠に生き続ける。この想いをあの世まで持って行って、あの世で一緒になるんだという強い気持ちを持ち続けることが大事であり、これも美しい愛の形ではないだろうか。

私は、世間で言う「セカチュー」ブームが過ぎて、この本を読んだ。全盛期の頃には、映画やドラマにもなっていたが、それらも一度も見たことがなく、内容すら知らなかった。しかし、本を読んで私もはまってしまった。ちょっと遅めの「セカチュー」マイブームの到来である。冒頭でも述べたように、純愛という一つの愛の形の究極が描かれており、読んでいくうちに自然に物語に入り込め、気付いたら号泣していたというのもうなずける。恋愛ものが苦手という人も毛嫌いせずにこの本を読んで、自分の心にある純愛に触れてみては。



仙田 満 著

『子どもとあそび ―環境建築家の眼―』

(岩波新書、1994年)

人文学部福祉文化学科3年次 平 田 咲季子

私は人に本を薦めるほど本を読んだことがないので、図書館委員の先生から、この図書館報の原稿の依頼がきた時は正直、びっくりしましたが、最近、一冊のおもしろい本に出会ったので紹介したいと思います。

この本を読むきっかけになったのは、後期に受講した講義で、子どもと文化についていろいろ調べたり、学んだなかで、子どもとあそびについて興味を持ち、「子どもとあそび」というタイトルに惹かれ、本を手に取り読んでみました。

この本は長年にわたって子どもの遊び環境の調査とそのデザイン・建築に携わってきた著者の眼から見た子どものあそびやあそびの空間、時代の変化や問題の表出、そして提案を①あそびの原風景、②子どもの空間、③世界の子ども、④あそび環境の現在、⑤子どもと大人の5つにわけられ、それらがエッセイの形で書かれていて、最近の子どもの遊び方とその遊び方によって子どもはどんな知識や経験を身につけるか、最近の子どもの遊びと戦後を生きた筆者の遊び方の相違点などをおもしろく記されており、とても読みやすい本でした。

この本を読んでいて、非常に興味深かったものは、この世の中には大人のための空間や大人だけの場所というのは数多く存在しているのに、子どもだけの場所や、子どもだけの空間はないということです。確かに考えてみると子どものための施設はありますが、しかし多くの場合、大人が管理している子どもの施設というのが実情です。子どもたちが大人から離れて、自立的

に持っている空間ではないのです。

以前、昔の子どものあそびや文化について調べる機会があったのですが、昔の子どもたちは今のこどもたちと違い、普段の暮らしの中で常に役割分担としての自分の仕事（手伝い）がありました。昔の子どもは、学校での勉強や家での仕事が終わると、何をどうしようと大人からあれこれ言われないあそび場が存在し、田畑や野原、海岸や裏山など、様々な所に子どもたちの秘密の場所を持っていました。また、昔の大人たちは子どもに干渉するほど暇ではなく、忙しかったので、子どもたちは大人から干渉されない自由なあそび場を持っていました。

今の子どもたちは、家での手伝いに替わって塾やお稽古事の傍らにあそぶという事が主流になっていて、子どものあそび時間は昔も今もさほど変わらないのですが、あそびの内容や環境が変化しています。

この本の中で、著者は、あそびというものはあそび時間、あそび空間、あそび集団、あそび方法という4つのあそび環境の要素が互いに影響しあっていると述べています。また、最近の遊びの環境は以前と比べて悪化しており、それが循環していると述べています。

子どもは今も昔も遊びの天才であると言われていています。しかし、緑地や空き地のない街、交通戦争、塾やけいこ事に追われる忙しい毎日など、今の子どもたちをとりまく環境は、彼らからどんどん遊びを奪いつつあるということをこの本を読んで感じました。

水上 勉 著

『土を喰ふ日々 わが精進十二ヶ月』

(文化出版局、1978年)

人文学部国際コミュニケーション学科2年次 坂 本 草

「土を喰ふ日々」。一体何のことやら？と思われる人も多いのではないだろうか。

副題「わが精進十二ヶ月」とするこの本は、九つで入寺した作家水上勉の精進日記のような作品である。水上さんは寺での精進生活と、十六歳から十八歳まで隠侍（老師の女房役のようなものらしい）を務めたこともあるそうで、おかげで精進料理をまかりなりにも自分でやれるようになったと記す。

一年間、軽井沢に住いをもち、畑を耕し、そこから眺めるけしき、思いが、月々の季節感と共に水上さんの感受性で豊かに表現されている。そこにちらほらと水上流精進料理レシピのようなものが潜んでいる。

なぜ、水上さんが「土を喰ふ日々」としたのか。それは、寺にいたころの和尚さまの教えと、自身の生活から感じ取ったものが強くでているように思う。水上さんがいた寺は大層貧しかったらしい。買い物に走るという贅沢をすれば兄弟子から怒られたそうだ。

そこでその日その日畑に出て、文字通り畑と相談するのである。畑と相談するとは、そこに出ているものを見て、ようやくその日の献立を決める。そうなると必然的に、食べられるものは「旬」のものとなる。買い物に走れば真冬に胡瓜が食べられるのとは違う、旬を味わうのだ。

「旬を喰うこととはつまり土を喰うことだろう。」水上さんはいう。年がら年中切らさずに同じもの置くスーパーは確かに便利だし、うまく使えば栄養素が偏ることもない。だけど、夏にはスイカ、冬にはみかんといった具合に、季節、旬を感じさせる楽しみがあった方が心が温かくな

るように思う。店頭で旬物を見たときに「ああもうこんな時期か」と感じたことは私以外にも多くの人にあるだろう。

何のために食すのだろう。そう疑問をなげかける人は少ないのではないだろうか。「働くため」「生きるため」と答えが返ってきそうだが、私は「楽しむため」と思う。（いかにも人間的だが）そしてそれが楽しい生を送れるのではないだろうか。

私がこの本をすすめる理由は、とても単純だ。食べる楽しみがここに書かれているからである。例え、その本と全く違う食生活でも、楽しんでいればそれで良い。（ただそこに少しばかりの体への気遣いがあるってほしいと思う）そして一食一食に重みをおいてほしい。楽しんで食べる。簡単なようでやっている人は少ないように思う。良い食事からは良い健康と精神が保たれる。実際自分も「一人暮らし」というものに感けて、自炊をさぼったり、食べなかったりすることも多々ある。読んでいて改めて、自分の食に対する軽忽さを感じた。

そしてまた、この本の中には簡素ながら、おいしそうな料理が多数載っている。この通り挑戦してみてもいいし、アレンジしてみてもいい。料理をするうえでの、試行錯誤、そして食を出す相手への心遣いが大切だとも記されている。料理も遊びの一種だと思う。冒険心があった方がたくさんの発見があって喜びも増える。それに伴う失敗も次に活かせばいい。この紹介文を読んで、じっくりきた人がいればぜひ読んでほしい。じっくりこなくても読んでほしい一冊である。

**新着図書案内(抄)**

請求記号	書名	著者名	発行所
007.3    E59 070.8    So28    1-12 141.33    Mi96 210.75    Mi47 289.2    So81 302.53    H98 319.5301    Sc1 323.149    Ke51 326.3    H29 332.107    H51 333.8    Ko51 360    Y19 369.02    Se22 369.276    U42 481.35    B46 498.13    Ko73 518.8    E19 519.04    R25 601.1    F76 815.7    N77 824    C52 838    N43 910.268    M89    2 916    I94	インターネットと「世論」形成：間メディアの言説の連鎖と抗争 総合ジャーナリズム講座 学習効果の認知心理学 憲法9条と専守防衛 満州国遺民：ある在日朝鮮人の眩き 分断されるアメリカ 「日米関係」とは何だったのか：占領期から冷戦終結後まで 憲法改正大論争：「国民憲法」はこうして創る 犯罪被害者支援とは何か：附属池田小事件の遺族と支援者による共同発信 平成不況の論点：検証・失われた十年 援助の潮流がわかる本：今、援助で何が焦点となっているのか 希望格差社会：「負け組」の絶望感が日本を引き裂く 世界の福祉：その理念と具体化 字が話す目が聞く：日本語と要約筆記 乱交の生物学：精子競争と性的葛藤の進化史 「医療費抑制の時代」を超えて：イギリスの医療・福祉改革 エコロジーと歴史にもとづく地域デザイン 「環境の世紀」へ：いまレイチェル・カーソンに学ぶ 活力ある産業経済モデルへの挑戦：日本の産業政策、回顧と展望 日本語のとりたて：現代語と歴史的变化・地理的変異 日本人の間違えやすい中国語 ナマツた英語のリスニング 実践の教育：「グスコブドリの伝記」にみる教育的実践 夢紡ぐ綾：母と娘のデュエット	遠藤薫編著 水野りか著 田中和彦著 宋斗会著 サミュエル・ハンチントン著；鈴木主税訳 マイケル・シャラー著；市川洋一訳 中曽根康弘，西部邁，松本健一著 酒井肇 [ほか] 著 大竹文雄，柳川範之編著 国際協力機構国際協力総合研修所編著 山田昌弘著 久塚純一，岡沢憲美編 上村博一著 ティム・バークヘッド [著]；小田亮，松本晶子訳 近藤克則著 法政大学大学院エコ地域デザイン研究所編 レイチェル・カーソン日本協会編 福川伸次著 沼田善子，野田尚史編 張起旺著；児玉充代訳 中谷美佐著；森川尋美アクセント解説 風間効著 岩元綾，岩元甦子著	東京電機大学出版局 日本図書センター ナカニシヤ出版 梨の木舎 風媒社 集英社 草思社 ビジネス社 ミネルヴァ書房 東洋経済新報社 国際協力機構国際協力総合研修所出版会 筑摩書房 早稲田大学出版部 新樹社 新思泉社 医学書院 学芸出版社 かもがわ出版 日経BP企画 くろしお出版 国書刊行会 ジャパンタイムズ リーベル出版 かもがわ出版
<b>&lt;琉球弧関係&gt;</b>			
R193    B38 R201.7    To49 R349.3    O52 R588.57    H13 R940    N37	英宣教医ベッテルハイム：琉球伝道の九年間 対馬丸遭難の真相 しのび寄る破綻：市町村財政危機 泡盛の文化誌：沖縄の酒をめぐる歴史と民俗 琉球弧あまくま語り	照屋善彦著；山口栄鉄，新川右好訳 當間栄安著 沖縄タイムス社編 萩尾俊章著 中村喬次著	人文書院 琉球新報社 沖縄タイムス社 ボーダーインク 南方新社

(この案内は、2004年10月～2005年3月に受け入れた新着図書の抄録である)

**貸出トップ20**

(2004年10月～2005年3月)

順位	請求番号	タイトル / 著者名	貸出回数
1	933    R78    5-上	ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団 [上] / J.K. ローリング作；松岡佑子訳	19
2	369    Mi43    6	新しい高齢者福祉：地域福祉への展望 / 川村匡由著	13
3	829.1    Sh72	語学王韓国語 / 塩田今日子著	12
4	335    H87	堀江真文のキャンタン!儲かる会社のつくり方 / 堀江真文著	11
//	361.42    W46	国際感覚ってなんだろう / 渡部淳著	//
//	378    To13    3	光とともに・・・：自閉症児を抱えて [3] / 戸部けいこ著	//
//	810.7    N77    1	日本語能力試験対応漢字・語彙問題集 [1級] / 白寄まゆみ [ほか]編著	//
//	933    R78    5-下	ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団 [下] / J.K. ローリング作；松岡佑子訳	//
//	R302    O42	沖縄文化論：忘れられた日本 / 岡本太郎著	//
10	333.8    I96	地球人として生きる：市民による海外協力 / 岩崎駿介編著	10
//	361.5    Ma81	日米文化の特質：文化変形規則(CTR)をめぐって / 松本青也著	//
//	378    To13    1	光とともに・・・：自閉症児を抱えて [1] / 戸部けいこ著	//
//	378    To13    2	光とともに・・・：自閉症児を抱えて [2] / 戸部けいこ著	//
//	816.5    O22	大学生のためのレポート・論文術 / 小笠原喜康著	//
//	913.6    Ka84	世界の中心で、愛をさけぶ / 片山恭一著	//
16	335.5    Ts85	バナナと日本人：フィリピン農園と食卓のあいだ / 鶴見良行著	9
//	365.4    So28	こんなとき、いくら必要?暮らしのお金の本 / 綜合社編集	//
//	369.26    Ka83	高齢者福祉の比較文化：マレーシア・中国・オーストラリア・日本 / 片多順編著	//
//	369.27    Ka93	セックスボランティア / 河合香織著	//
//	378    To13    4	光とともに・・・：自閉症児を抱えて / 戸部けいこ著	//
//	810.7    Su76    初級1	みんなの日本語 [初級1: 教え方の手引き] / スリーエーネットワーク編著	//
//	811.2    Ka55    4	1級漢字2000 / アークアカデミー教材作成委員会編	//
//	837.7    Pen    3	An ideal husband / Oscar Wilde ; retold by Mary Gladwin	//
//	913.6    W47	インストール / 綿矢りさ著	//

# 図書館事情

- 2004年10月1日 図書館報第39号発行  
平成16年度3回情報ネットワーク管理担当者研修  
整理係 知名 定健 参加 (東京)
- 11月1日 図書館システム更新再開
- 11月16日 第5回図書館運営委員会  
議題：1. 電子ジャーナルの導入について  
2. その他
- 11月16日 沖縄県図書館協会平成16年度総会 田里修館長参加
- 11月20日～21日 推薦入学試験
- 12月9日 県大学図書館協議会研修会 (琉球大学附属図書館)  
演題：無線綴じ本の簡易製本の作り方  
講師：大湾ゆかり氏 (沖縄県文化振興会 修復士)
- 2005年1月15～16日 センター試験
- 2月8日 沖縄県図書館協会平成16年度第4回機関紙部会へ  
文献係主査 田代真紀参加
- 2月11～12日 一般入学試験A日程
- 2月13日 図書館運営委員会  
議題：1. 報告事項  
(1) 「沖縄大学研究費の助成に関する内規」の改正について  
研究図書取り扱いについて  
(2) 2004年度学生用図書予算の執行状況について  
2. 審議事項  
(1) ミニシアター運営方針について  
(2) その他
- 2月24日 第2回沖縄県大学図書館協議会講演会 (琉球大学附属図書館)  
講師：小西和信氏 (国立情報学研究所開発・事業部次長)
- 3月6日 一般入学試験B日程  
11日 卒業式  
20日 一般入学試験C日程

## 2004年度 利用状況 (2004年4月～2005年3月)

開館日数	276	図書貸出冊数	13,358
入館者数	118,850	文献複写	1,767 (17,579枚)
貸出者数	7,007		